

## 図書 紹介

### 科学のミスコンダクト

- 科学者コミュニティの自律をめざして -

編集協力：日本学術会議事務局

編集・発行：(財)日本学術協力財団 / 〒106-0031 東京都港区西麻布 3-24-20 /  
03-5410-0242 / A 5 判 / 234 頁 / 価格 1,800 円 (税別) / 2006 年 9 月 8 日発行

最近、捏造、改ざん、盗用などが社会問題となっている。このような不正行為は、科学においては「ミスコンダクト」とよばれている。

科学は高い志をもって行われるべきであるが、その基本であるデータをおろそかにして発表する人が目につく。以前は興味のあるデータが出るときちり再現性を取り、間違いのないことを検証して発表するのが当たり前であったが、昨今は先にゴールを切ろうとするあまり不確実なままで早く発表する傾向があり、間違っていなかったら最初の発表者として認められるし、もし間違っていたら問題にはならないだろうという技術倫理の欠如も見逃すことのできない問題となってきた（「座談会」より）。

本書は、公開講演会「科学におけるミスコンダクトの現状と対応策 - 科学者コミュニティの自律に向けて-」（2005 年 7 月 4 日）において報告されたものを中心に加筆・修正されたもので、基調講演、講演、パネル討論及び座談会から構成され、その内容は人文科学、理学、医学、工業技術分野に及んでいる。

まず開会挨拶及び基調講演では、「科学者倫理と自立した科学者コミュニティの確立」と題して、日本に特異な問題はないか、失敗はどこまで許されるか、ピアレビューの透明性を確保できるか、ポストドクは「よそ」へ出そうなどについて報告されている。続いて第 1 部の講演「日本学術会議の取り組み」では、なぜミスコンダクト問題を取り上げるのか、典型的な事例を調査、科学上のミスコンダクトの特徴、マスメディアの役割など、「わが国の学協会の取り組みに関する調査結果の分析」では、倫理綱領とプロフェッショナル・オートノミーは表裏の関係、倫理綱領をもつ学会は少ない、ミスコンダクトが問題になった学会などである。次いで、各分野におけるミスコンダクトの事例と対策において、「人文学におけるモノ資料の真贋」では、旧石器発掘捏造事件の性質など、「理学における事例 - シエーン的事件から」では、物理学ではミスコンダクトが起こりにくかった、シエーン的事件の概要など、「医学研究における日米の事例と対応策」では、アメリカの対応策の経緯、標

準的な審査手順、日本の実情などである。「科学者のミスコンダクトの概念的フレームワークと組織的審査体制の確立」では、ミスコンダクトの範囲、組織の「上下関係」と組織成員の「相互関係」、個人的内因性要因に基づくミスコンダクト、共通の判断基準が必要など、「諸外国における組織的な審査体制」では、政府機関又は大学・研究機関が対応していることを報告している。

第2部パネル討論「対策、申し立ての審理と裁定の手順、組織的審査体制のありかた」における話題提供として「科学の自律、理性と寛容で」では、メディアが変わることができるか、不祥事の報道の仕方、「良心的誤り」と捏造・偽造・盗用、内部調査って難しいなど、次いでパネリストからは、内部基準が通用しなくなった、プロとアマの境界がなくなったことによる問題など、自由討論では、どんな処罰規定を設けるのか、なぜアメリカの動きが日本に入らないのか、公的チェック機関が必要ではないかなどである。参考資料として「わが国学協会の取り組みに関する調査結果」、「アメリカと中国における科学上のミスコンダクト審査体制」及び「英国におけるミスコンダクト防止策と処理手続き」が載せられている。

座談会（『学術の動向』2006年8月号）では、医学・医療分野では研究・教育の体制が不十分、自己管理の組織が不可欠、専門家集団としての自律が必要、基本は専門職を教育する教育などについて報告されている。

本書は、当学会においても「行動規範」など検討されるべき事柄もあると思われる。関係各位には是非一読をお願いしたい。（学会事務局）

